

第二章



三日三晩。トヨは山中を彷徨した。

湧き水を飲み、草の根をかじり、幽鬼のようにひたすら歩いた。暗い照葉樹の林が、いつ途切れるともなくつづいていた。

執念だけがトヨを支えていた。

邪馬台を滅ぼす。その日までは生きる。それが、父王や狗奴の民びと、そして恐らくは死んだであろうヒナの霊を鎮めることになる。自分が生きなければ、彼等の霊は恨みを戴いたまま宙宇

をさまよい、大地に害をなすであろう。

四日目。山腹に洞窟が見つかった。焚き火の跡があった。その傍らに、干した芋が束ねておいてあった。水を湛えた瓶もあった。

トヨは、夢中で干し芋を食り、水を啜った。腹がくちくになると、それまでの疲れが一気に押し寄せた。総身が鉛のように重くなり、意識がすつと遠のいた。トヨは地に伏、眠りに落ちた。

けたたましい笑い声に、トヨは眼を覚ました。

誰かの指が乳房をなぞっていた。

はつとその手を振り払い、起き上がった。また、どつと、笑い声が起った。

トヨの周囲を、四人の蛮人が取り巻いていた。髪も髭も伸び放題、扁平な顔は腐った落ち葉のようにどす黒く汚れ、表情も定かではなかった。ぼろをまとい、腰に粗末な刀を差していた。

洞窟の隅で一人の蛮人が、ヒナがトヨに与えた甲冑と剣を手に取り、しげしげと見つめていた。胸に巻いた布が半ばめくられていた。トヨは急いで胸を覆い、立ち上がった。

蛮人たちも立ち上がった。黙って、トヨを見つめた。トヨは、隅にいた蛮人に駆け寄り、甲冑と剣をひったくり、洞窟の外へ出ようとした。

一人の蛮人が、トヨの腕をつかんだ。凄い力だった。トヨは振り向きざま、蛮人の頬に平手打ちを喰わせた。蛮人は動ずる気配もなく、にやにや笑った。他の蛮人たちが、またどつと笑った。

「この甲冑と剣は吾のものである」

トヨは言った。蛮人たちは返事をしなかった。

「吾は、行く。手を放せ」

蛮人たちは反応しなかった。言葉を通じないのか。トヨは訝った。トヨの腕をつかんでいた蛮人が、またもや、トヨの乳房に指を這わせはじめた。

「触るな」

トヨは金切り声をあげた。だが、蛮人はやめなかった。トヨは、膝で蛮人の股間を蹴りあげた。蛮人の手がトヨの腕から離れた。蛮人は、一、二歩後退した。股間を両手で抑え、うめき声を発しながらしばらく痛みを堪えていたが、やがて顔を上げ、いまいましそうにトヨを見つめた。トヨは剣を抜いた。

「吾は行く。止めれば、汝等を斬る」

股間を蹴られた蛮人は、すつと背をのぼし、トヨに歩み寄った。トヨは怯えた。両腕をのぼして切りかかった。蛮人はさつと身かわし、トヨの腕をつかみ、ねじあげた。トヨは悲鳴をあげて、剣を取り落とした。またも、他の蛮人たちが笑った。

蛮人は、二度、三度、トヨの頬を殴りつけた。トヨはばたきと地面にしゃがみこんだ。しばらく、頭がふらふらした。意識を取り戻す前に、蛮人はトヨの首をつかんだ。息が詰まった。意識が遠のいた。死ぬ……、と思った。いや、死んではならない。

体が自然に動いた。トヨの右手が蛮人の股間に伸びた。

「ぎゃあああああ！」

蛮人の絶叫が洞窟の内部に響いた。トヨは、蛮人の睾丸をぎゅつと握りしめていた。

蛮人は首を左右に激しく降り、必死でトヨの腕をふりほどこうとした。だが、トヨは離さなかった。意識がしだいに戻ってきた。トヨは、蛮人が激痛のあまり身動きもできなくなっていることを悟った。とつさに、傍らに落ちた剣を拾い上げ、蛮人の腹部に突き刺した。剣は、男の背中へと抜けた。

蛮人は仰向けに倒れた。トヨはしゃがんだまま、蛮人の血で赤く染まった己が掌を見つめた。それから蛮人を見た。蛮人は、腹部から背中まで剣を突き通され、獣のような咆哮を発しながら、七転八倒していた。

軀の芯で今までに覚えたことのない感覚が芽生えつつあった。歎び。トヨは人を傷つけることに歎びを覚えていたのだ。

笑って眺めていた蛮人たちの目つきが変わっていた。三人は、腰の刀を引き抜いた。一人が、洞窟の入口を塞ぎ、二人の蛮人が、じりじりとトヨに迫った。トヨは洞窟の壁に追いつめられた。

「ぐっ」

入口を塞いでいた蛮人が、突然うめき声をあげて倒れた。延髄から喉まで矢に貫かれていた。次の瞬間、二つの影がとびこんできた。女だった。一人は剣を抜き、一人は手に革に刃を埋め

込んだ鞭を持っていた。

剣を持った女が刃を一閃させた。蛮人の右腕が肘のところで切断され、握りしめた刀ごと宙に飛び、落ちた。

もう一人の女が鞭を振るうと、蛮人が腰に巻いていた毛皮が切り裂かれ、性器が露わになった。さらに女は鞭を振るった。鞭は蛮人の陽物に巻きついた。女が鞭を引くと、陽物は根元からちぎられた。蛮人は何が起こったのかわからず、ぼんやりと女の鞭の先からめとられた肉片を見つめていたが、やがて己が股間を見下ろして絶叫した。女は男の睾丸を足の甲で蹴りあげた。蛮人は、滝のように血が噴き出す股間を抑えて転がった。

弓矢を携えた女が微笑みながら入ってきた。

「怪我はなかったか？」

剣の血を拭いながら女が訊ねた。

三人の女たちは、年はトヨよりも三歳か四歳上であろうか。肌は陽に焼け、背が高く、ふくよかな乳房、長く伸びた手脚、引き締まった四肢の持ち主だった。胸と腰を、鉄片を仕込んだ粗布で覆っているだけの、裸同然であった。

異様なのは、顔にほどこした刺青であった。一人は頬に、一人は目の下に、一人は額に、花模様刺青をしていた。顔に刺青をする風習は、「農」の普及とともに途絶えていた伝統であった。

彼女らが、猟で生業をたてている一族であることは明らかだった。

「礼くらい、言え」

頬に刺青をした女が鞭をたたみ、腰にくくり付けながら言った。きりりとした眉の下の大きな二重瞼に鋭い油断なさげな光が灯っていた。

「サヤ、待て」

額に刺青をした女が剣を鞘に収め、頬に刺青をしたサヤ（小弥）を制した。額が広く、太い眉に聡明な容貌だった。

「里の者か？」

トヨは答えなかった。女は死にきれず、号泣と嗚咽と呻きを漏らしながら悶絶する蛮人たちを冷ややかに一瞥して言った。

「この蛮人どもは、近くの里を荒らした。女を犯し、米を奪った。吾等は、その里の長から頼まれて彼等を追っていた。汝が里の女なら、里まで送る。他の里の女なら、汝の里まで送る」

「アユメ！」

もう一人の女が洞窟の奥から叫んだ。額に刺青をしたアユメ（鮎媛）と呼ばれた女が振り向いた。

「どうした。マユワ」

「お宝だ」

目の下に刺青をし、弓矢を背負ったマユワ（眉輪）が洞窟の奥から、瓶を運んできた。ふっくらした頬に、愛嬌のある細い眼をしていた。亀の中には勾玉や黒曜石、金属製の装身具がぎっしりと詰まっていた。アヌメは微笑んだ。

「市に持ってゆけば、高く売れるだろう」

「待て」

トヨが叫んだ。三人の女たちはいつせいにトヨを見た。トヨは女たちを睨んでいた。

「その宝物は、この蛮人もが、いずこかのクニの蔵から奪ったものである。そのクニに返すべきである」

女たちは顔を見合わせた。サヤが怒鳴った。

「汝は、吾等に命を救われておきながら、吾等に指図するか」

「もし、その宝物を市で売れば、汝等は、この蛮人どもと同罪である」

トヨは凜として言った。女たちは、トヨの威厳に気押され口をつぐんだ。アヌメが訊ねた。

「汝は、里人ではあるまい。いずこかの王族であろう」

トヨは答えなかった。アヌメは重ねて問うた。

「王族ならば、なぜ、一人でこのような洞にいる」

トヨの眼から涙が溢れた。トヨは俯き、嗚咽をかみ殺して言った。

「王族にものを問うならば、礼を尽くせ」

女たちは呆れたように顔を見合わせた。アヌメが言った。

「汝はやはり王族か。しかし、吾等もまた、王族である」

「王族が、なぜ山賊の真似をする」

「吾等は、クニを滅ぼされた」

トヨは顔をあげた。アヌメは言った。

「伊都（イト）というクニがあった。ヒミコの兵たちに滅ぼされた。吾等三人だけが逃げ延びた。いまは、生きるために、山賊や盗人を退治している。彼等がかすめ取った宝物は、その報酬として吾等のものになる」

「では、汝等のクニもまた、ヒミコに滅ぼされたのか」

「然り」

「ならば、汝等は、吾とともに、ヒミコを滅ぼさねばならぬ」

「では、汝のクニも……」

トヨは問いには答えず、繰り返した。

「汝等は、吾とともに、ヒミコを滅ぼす」

トヨは言い放ち、洞窟を出た。伊都の女たちは慌ててトヨを追った。血と異物の臭いで充満した洞窟に、断末魔の激痛に悶え苦しみ喘ぐ四人の蛮人が取り残された。

クニを滅ぼされて三年の間、辛酸を味わいつづけたアユメ、サヤ、マユワの三人と違い、トヨは王女としての尊厳を捨てられないでいた。三人が自分の意向に従うことを、当然としていた。遠慮というものが皆無であった。三人もまた、なぜか、この王女に逆らうことができない。同じ王族ではあったが、トヨにはより人を統べる威厳があった。

「アユメ」

狷介な性格のサヤは、不満を隠さなかった。

「ほんとうに、狗奴の王女とともに、邪馬台を滅ぼすつもりなのか」

出会ってから、十日がたっていた。市への道すがら、アユメはトヨに剣を教えた。トヨには天与の才があった。あつという間に術を呑み込み、アユメをも凌いだ。

明日、山を一つ越えれば市に着くその前夜、山腹の洞窟に落ちつくなり、トヨはすやすやと寝入った。

サヤの苛立たしげな問い掛けは、毎夜、トヨが眠りにつくなり始まる。トヨは、三人の女たちが自分の身に危害を加えることはないと思いきっているようであった。

「わからない……」

三人のなかで一番年長である十八歳のアユメの答えはいつも同じだった。一番年下で十六歳、呑気なマユワは、

「アユメに従う」

と言うのみであった。十七歳のサヤは口を曲げて押し黙った。しばらく沈黙がつづいた。アユメが口を開いた。

「サヤ」

「何か」

「汝は、ヒミコを憎むか」

「憎む。アユメはどうだ」

「憎む。狗奴の王女と同心である」

「だが、吾等だけでヒミコを討てるか。邪馬台は大国である。ヒミコに近づくことすら難しい」

「吾もそう思っていた。だが、この狗奴の王女に出会ってから、忘れていたことを思い出した」

「忘れていたこと？」

「あの日のことは、サヤもマユワも覚えてはいるはずだ。三年前、ヒミコの兵たちが伊都の里に火を放ち、民びとを殺戮し、王をなぶり殺しにした。吾等は三年間、泥水を啜り生き延びた。山賊になって生き延びた。吾等は、里人からは奪わない。賊から奪う。だが賊から奪ったものは、この狗奴の王女の言うとおりに、もとはといえ、民びとのものであり、他国の王族のものである」

サヤは何か言いかけて沈黙した。あの日、伊都を覆った阿鼻叫喚の地獄図が脳裏に蘇った。アユメは呟いた。

「狗奴の王女についてゆけば、王族の身に戻れそうな気がする」

古代の市は、クニとクニを結ぶ道の交わるるところに出来る。

道と道が交わる場を「辻」という。「辻」は、ふつうの民びとにとって、自分たちの領域と外界を隔てる異界への入口だった。異なるクニの異人たちと交わる聖地だった。

この時代の交易は物々交換である。貨幣は、呪術の具としてしか用いられていない。一本の杉の木がぼつんと生えていて、しめ縄が飾られている。そこで交換が行われる。互いに無言である。神聖な場所で言葉をお互い許すことは許されない。身振り手振りのみで物が交換される。

「辻」から少し離れた場所には、宿が何軒か並んでいる。交易という儀式が行われた後、人々は宿で酒を飲み、歌い舞う。さらに、クニとクニを往還する使節たちも、この宿を宿泊に使う。

アユメたちは交換を終えた後、一軒の宿に入った。宿といっても土間しかない。土間の奥には、四つの柱を建て、粗布で囲い、藁を敷いた寝屋がある。そこに泊まれるのはクニの大官級の使節たちだけであった。余の者は、土間で雑魚寝をするのである。

トヨとアユメ、サヤ、マユワの四人が、土間の隅に車座になって座ると、小山のように肥え太った醜女が、その傍らに放り出すように四つの杯を置いた。酒杯である。酒は、土間の中央に大瓶が置かれている。そこから好きに酌んで飲めばいい。食べ物も自炊するものとされている。だが、四人は食糧を持参していない。

「食べるものはないか」

アユメは、醜女に貝殻を差し出した。貝殻はこの時代、通貨の役目を果たしている。だが、醜女はちらりと貝殻を見ただけで、さっさと奥へ去っていった。

「口が聞けぬのか」

気短なサヤが怒鳴った。アユメはその肩を抑えた。マユワが立ち上がった。

「他の宿で何か分けてもらおう」

マユワはアユメから貝殻を受け取って出ていった。

入れ違いに、にわかに入口がやかましくなった。同時に、さきほどの醜女と、宿の主らしい小男が飛び出してきて、床に這いつくばって平身低頭した。

十人ほどの兵を引き連れた、長い髭をはやした男が入ってきた。どこかのクニの使節であろう。髪の毛に鬘（ミズラ）を結び、白い袖のついた上衣にズボンをはいている。首にいくつも首飾りを垂らしているのは、身分の高さを示していた。

「トミのスクネ（鳥見之宿祢）様」

宿の主人が這いつくばったまま、声を出した。

「宿祢……、邪馬台の大官か。それとも邪馬台の属国の臣か」

アユメが呟いた。トヨが、邪馬台という言葉に鋭く反応した。

「あの者は、ヒミコの臣か？」

「わからぬ。邪馬台に服属するクニの大官も、邪馬台と同様、宿祢と呼ばれる」

トミの宿称と呼ばれた男は、醜女が恭しく土間に敷いた毛皮にどっかりと座り、おごそかに主人に声をかけた。

やがて、十人の兵たちにも食事と酒が運ばれ、にぎやかな宴となった。兵たちの話し声に耳を傾けていたアユメは、トヨに囁いた。

「どうやら末羅（マツラ）の者のようだ」

「末羅……か」

末羅は、邪馬台と戦わずして降伏し、服従を誓ったクニである。王も民びとも抗戦を望んだが、一部の者がひそかに邪馬台と内通し、王族の首をはねてヒミコに差し出した。今の王は内通した者のなかの首謀者である。

宿の主人は、卑屈な笑顔を浮かべながら、トミの宿称に酒を注いだ。トミの宿称は何度も杯を干し、顔を赤く染めた。醜女が、乾し肉や干魚、粟、蛙などの食物を高坏に盛って忙しく運んでいる。

ふと、宿の主人が宿称が首にかけている木の札に目を留めた、何か問うた。宿称は上機嫌で答えた。主人は大仰に感嘆し、しげしげと木の札を眺め、追従笑いを絶やさなかった。

トヨは問うた。

「アユメ、あの札は何か」

「手形である」

「手形とは何か」

「邪馬台は王都の周囲に城柵をめぐらし、強兵を配し、厳しく人の出入りを見張っている。あの手形がなければ、柵の内に入ることはできない」

酩酊したトミの宿称は、手形を首からはずし、主人に手渡した。主人は三拝して手形を押しただき、しげしげと眺めはじめた。

「アユメ。あの札があれば邪馬台に入れる」

トヨがアユメに囁き、立ち上がった。

「何をする」

アユメの問いには答えず、トヨはつかつかと兵たちを押し分け、宿の主人の前に立った。主人もトミの宿称も、呆気にとられてトヨを見上げた。トヨは主人に向かって怒鳴った。

「汝は、吾に無礼を働いた」

言うなり、主人の胸ぐらをつかんで、引っ張り起こした。首を締め上げられ、主人は苦しげに呻いた。

「無礼とは何を？」

「分からぬか」

いきなり、主人の股間を膝で蹴りあげた。主人は激痛に体を硬直させた。

「分からぬともよい。吾等は、汝と宿をともにはできぬ」

トヨはさらに二度、鞆丸に膝蹴りを浴びせた上で突き飛ばし、くるりと踵を返した。主人はどさりと床に倒れ、股間を両手で抑え、立ち上がることはおろか、息をすることもできない。

「汝、何をするか」

奥から、醜女が飛び出してきた。トヨの胸ぐらをつかみ、丸太のような腕を振り上げた。ぶんと唸りをたてて、女の拳が飛んできた。トヨは身を屈めて拳をかわし、さつと片足を出して醜女の足首を払った。醜女はつんのめった。トヨはその腰を軽く蹴った。醜女は地響きをあげて腹這いに倒れた。

末羅の兵たちは、わっと哄笑した。手足を叩き鳴らした。醜女は、顔を真っ赤にして立ち上がり、再びトヨに向かって突進した。トヨは、落ちついて身かわした。醜女は勢いあまって、壁に拳を叩きつけた。醜女の腕は、泥で作った壁にのめりこんだ。背後からトヨが、醜女の股間を蹴りあげた。

醜女は悲鳴をあげ、右腕を壁にのめりこませたまま、左手で股間を抑えて膝をついた。トヨは、醜女の髪の毛をつかみ、額を壁に何度も打ちつけた。醜女の額が割れ、顔が鮮血に染まった。トヨは、すでに半ば意識を失った醜女の襟首をつかんで仰向けに倒し、突き出した腹や垂れ下がった乳房をさんざんに踏みつけた。醜女は苦しげに転げ回ったが、やがてぐったりと動かなくなった。

マユワが干した果物を抱えて戻ってきた。醜女を蹂躪するトヨを見て、口を開けた。

「アユメ、サヤ。トヨは何をしている」

アユメは首を振り、サヤは苦々しげに俯いた。

末羅の兵たちは再び拍手した。指笛を鳴らし、口々に褒めそやした。

「あの巖のごとき女を、よくも素手で倒したものかな」

女たちが髪の毛振り乱して戦う様に、末羅の兵たちは、欲情を催していた。だが、トヨが仰向けに失神した醜女の喉に踵を乗せ、喉笛を一気に踏み砕いたときには、兵たちの酔いは覚めた。

醜女の細い眼が飛び出し、黒々とした鼻孔から血が噴き出した。

トヨは、息絶えた醜女の腹を一蹴りし、呆然としているアユメたちに近寄った。

「行くぞ」

「待て！」

トミの宿衾が立ち上がり、わめいていた。

「女よ。汝、この男から手形を奪ったな」

アユメははっとしてトヨを見た。トヨの、乳房と乳房の間に、木片が小さく頭を出していた。トヨは、宿の主人の股間を蹴り上げ、相手が怯んだ隙に手形を奪い、胸に押し込んでいたのだ。

「手形を取り戻せ。その女どもを殺せ」

宿衾はわめいた。兵たちは、いっせいに剣を抜いた。

「アユメ……どうする？」

マユワが囁いた。アユメは迷っていた。サヤがいまいまして吐き捨てた。

「狗奴の王女のやり方は無謀すぎる」

トヨの動きは素早かった。剣を抜くと同時に、いちばん間近にいた兵士に襲いかかり、股間を蹴りあげ、怯んだ兵に剣をうちおろした。たちまち、首が一つ、血を噴いて転がった。

他の兵たちが、いつせいにトヨを囲んだ。次から次へと繰り出される剣を、トヨは鮮やかな動きで跳ね返した。猛然とつかかかってきた兵の首が一つ、飛んだ。さらに剣を一閃させると、剣を持ったままの右腕が一つ、地に落ちた。怯えて逃げようとした兵の背中に剣を突き立てると、刀身は兵の体を貫き、切っ先が柱に刺さった。トヨは、次の攻撃に備えて剣を引き抜こうとした。だが、硬直した兵の肉体はそれを許さなかった。兵たちの剣が閃いた。トヨは慌てて身を翻した。彼女の剣は、兵に刺さったままだった。トヨは剣を失い、尻餅をつき、六人の兵に壁際まで追い詰められた。

「斬れ！」

トミの宿祢が叫んだ。そのとき、三人の兵が血飛沫をあげて転がった。背後から、アユメ、サヤ、マユワが襲いかかったのだ。一人はアユメの剣に肩先から心の臓まで斬り下げられ、一人はサヤの鞭を首に巻き付けられ、背後から股間を蹴り上げられ、膝を落としたときにざっくりと鞭が喉を割いた。もう一人はマユワの矢に喉を貫かれた。

残る三人の兵は仰天したが、なす術もなかった。一人はアユメの剣に胴体を二つにされ、一人はサヤの鞭に陽物を引きちぎられ、一人はマユワに鞆丸を蹴りあげられ、転がったところを矢で

射られ床に縫い付けられた。

十人の末羅の兵はことごとく屍となり、血の海に沈んだ。トミの宿祢は尻餅をつき、がたがたと震えた。

トヨは土を払って立ち上がり、つかつかとトミの宿祢に近寄った。宿祢は平身低頭し、命乞いをした。トヨは冷然と言いつつ放った。

「汝は末羅へ帰れ。盗賊に手形を奪われたと、末羅の王に言え。盗賊は男であると言え」

トミの宿祢は夢中で何度も叩頭した。

「諾」

「兵たちを死なせて汝だけ無傷では、末羅の王は汝を信じない。立て」

トヨは宿祢の喉元に剣を突きつけた。宿祢は怯えたように立ち上がった。トヨは宿祢の股間に右手を延ばし、鞆丸をひとつ掴んでぎゅっとひねりあげた。宿祢は悲鳴をあげることもできず、激痛に身を振った。

「潰すのは一つだけである。もし、汝等が吾等のことを末羅の王に告げたら、残る一つも潰す」
ぐしゃっと音をたてて、宿祢の鞆丸が一つ潰れた。

その夜。

急いで「辻」を離れたトヨとアユメ、サヤ、マユワの一行は、途中の林のなかで野営した。ト

ヨは、何時ものように、すぐに寝入った。

宿の醜女や末羅の兵を殺戮し、末羅の大官や宿の主人の睾丸を潰して男として最大の恥辱と苦痛を与えたことも、この十三歳の王女にはなんの悔いももたらしめていないようであった。まして末羅の兵たちが報復に襲ってくるかもしれないなど、毛筋ほども憂えていない。

アユメは無言だった。トヨと同じように寝付きのよいマユワも、その夜ばかりは表情をこわばらせていた。

「恐ろしい、狗奴の王女よ……」

サヤが沈黙を破った。

「末羅の宿祢から邪馬台への手形を奪うのために、躊躇うことなく辻を血で汚した。末羅はあの辻から半日。宿祢が末羅の王に吾等のことを告げれば、末羅の王は吾等を追う。末羅は馬を持っている。すぐに吾等に追いつく」

当時、乗馬の術を持っているのは、大陸との関係の強い邪馬台だけだった。ただし、属国には、五騎ずつ馬と馬術に長じた兵が与えられていた。徒歩の兵が、騎兵と戦って勝ち目は無い。

「しかし、あの末羅の宿祢が約束を守れば、吾等は邪馬台に入り込むことができる」

マユワが言った。サヤは強く否定した。

「末羅の宿祢は約束を守らない」

「だがトヨが、あの手形をもつて邪馬台に入り込み、王都の内で騒ぎを起こし、吾等が外から襲

撃すれば……」

サヤは怒鳴った。

「ヒミコの王宮を守る兵だけで百人を越すという。四人で勝ち目があるか」

マユワは黙った。アユメが口を開いた。

「もう、引き返せない」

訝るサヤとマユワに、アユメは苦々しげに言った。

「どうやら、この狗奴の王女を助けたときから、吾等は、ヒミコと戦う宿命を背負ったのかもしれない」

翌日、山道に入り、峠を越していた四人は、遠くに馬蹄の轟きを聞いた。

四人は傍らの杉の木に登った。山の麓は開拓されていない火山灰地だった。馬にまたがった四騎の騎兵が、砂塵を濛々と巻き上げながら、こちらに向かっていった。その後ろに、一頭の馬が馬車を引つ張っていた。馬車には三人の男が揺られていた。

「間違いない。末羅の兵だ」

サヤが叫んだ。

「やはり……、あの宿祢、吾等のことを王に告げたのだ」

アユメも唇を噛んだ。トヨだけが落ちつき払っていた。

「マユワ」

トヨが言った。

「汝は弓が得意だ。馬に乗った兵を、射落とすことは出来るか」

マユワは杖にまたがったまま弓を構え、矢をつがえて遠く離れた騎馬隊に狙いをつけた。やがてトヨを見て微笑んだ。

「四騎すべては無理だ。二騎なら射落とせる」

「よし」

トヨは三人の女たちに命じた。

「マユワが二騎を射落としたら、アヌメとサヤは残る二騎に飛び下りて、兵を倒せ。吾は、あの馬車に飛び下りる」

四騎の兵を先頭にたて、自らは馬車に乗っているのは末羅の王だった。馬車には、青い顔をしたトミの宿祢と、あの宿の主人が乗っていた。二人とも鞆丸を一つずつ潰されていた。傷も癒えぬまま、王に扈従を命じられた。手形を奪った女どもの顔を覚えていいるから、というのが理由だった。

最初は、トヨに命じられたとおりの虚偽の報告をなした二人は、問い詰められるうちに、事実を白状した。末羅の王は激怒した。二人をさんざんに打擲し、精銳の騎馬隊を繰り出した。邪馬台

への手形を奪われたと知られば、ヒミコから過酷な罰が下るだろう。末羅の王は、怒りと恐怖に駆り立てられ、ひたすら馬を急がせた。

突然、末羅の王は、二人の兵が馬から転げ落ちるのを見た。兵の首や胸に、矢が刺さっていた。残る二騎が馬をとめ、上空を見上げたとき、剣を抜いた女が梢から降ってきた。

アヌメは騎兵の背後に飛び乗ると同時に喉を掻き切り、サヤは鞭を兵の喉に巻き付けた。たちまち、二人の騎兵は馬から転げ落ち、絶命した。

王は馬車を止め、たちすくんだ。二人の女は馬を降り、剣を抜いてこちらに近寄ってきた。背後で悲鳴があがった。振り向くと、トミの宿祢と宿の主人が馬車から転げ落ち、かわって女が一人、馬車に乗り込んだ。

末羅の王は、すぐさま剣を抜いたが遅かった。股間にずしりと重い痛みを感じた。まともに鞆丸を蹴りあげられたのだ。さらに顎を蹴られ、末羅の王は馬車から転げ落ちた。

騎馬兵を始末したアヌメとサヤが走り寄り、末羅の王に剣を突きつけた。トヨはゆつくりと馬車から降りた。

「末羅の王か」

王は激痛と屈辱に顔を歪めながら頷いた。

「汝は末羅の民びとを裏切り、クニをヒミコに譲り渡し、王の位に就いた。汝は敵である」

言うなり、トヨは剣を横になぎ払った。末羅の王の首が転げ落ちた。トヨは、さらに馬車から転げ落ちたトミの宿祢と宿の主人に眼を向けた。二人は、涙を流し、震えながら土下座し、命乞いをした。

「汝等が、吾等のことを末羅の王に告げれば、残るふぐり玉も潰すと言ったはずだ」

トヨは、まず宿の主人の顎を蹴りあげ、仰向けに倒し、その股間を踏みつけた。残った鞆丸が音をたてて潰れた。トミの宿祢は悲鳴をあげ、口のなかで何やらわめきながら、四つん這いで逃げようとした。トヨは、宿祢の背中に跨がって押さえつけ、手で残った一つの鞆丸を握り潰した。鞆丸を二つとも失った不運な男たちは、もはや悶え苦しむだけの力もなく、地反吐をはき、うつぶせに伏して痙攣するのみであった。裂けた陰囊から血と体液が流れ出、どす黒い血だまりを作った。

「狗奴の王女よ」

サヤがわめいた。

「吾等は昨夜、十人の末羅の兵と宿の女を殺した。そして今日、末羅の王と五人の兵を殺した。その二人もほどなく死ぬであろう。吾等は、まだ、血を流すのか」

「流す」

返り血を浴び、生硬な美貌を赤く染めたトヨは、威厳を保って答えた。

「ヒミコを滅ぼすためだ。邪魔する者があれば、いくらでも血を流す」

「狗奴の王女よ。吾は汝とともにには行かぬ」

「サヤ！」

アユメが叫んだ。サヤは首を振った。

「吾は決めた。狗奴の王女と行動をとものにできぬ。アユメ、マユワ、汝等が狗奴の王女に従うと言うならば、吾は一人で行く」

サヤは足早に、これまで来た道を引き返した。アユメとマユワは、呆然とサヤを見送った。サヤの姿が消えたとき、アユメはトヨを見て驚いた。

トヨはまっすぐにサヤが去った方を見つめながら、涙を流していた。

「アユメ……」

トヨは呻くように問うた。

「サヤは、なぜ吾を憎む」

「憎んでいるのではない」

「では、なぜサヤは行った。そして、なぜ、アユメとマユワは、サヤとともに行かない」
アユメとマユワは無言で俯いた。